

日曜日の休日、社会人一年目の彼は好意を抱く上司の小久保と宅呑みの最中だった。普段見ない私服であったので、酔いも手伝って彼の動悸は激しかった。スキニージーンズにオレンジのノースリーブニットで、普段の仕事で見る彼女とは異なるカジュアルな様子に、彼はすっかり見惚れていた。

「……あら？ 何を見てるの、後輩くん？」

挑発するような目つきを浮かべ、そう訊ねる小久保。

彼はすっかり慌ててしまい、要領の得ないことを口走ってしまう。小久保はそんな彼を上目遣いで眺めながら、焼酎のロックを口に運んだ。

「ねえ……ちよつと、こつち来ない？」

頬を朱色に染めながら、小久保はそう手招きをする。

彼は心臓を一層高鳴らせ、邪な妄想で頭をイッパイにしながら、彼はドギマギと小久保の傍へ近寄った。

「……うふふ」

妖艶な笑みを浮かべながら、小久保は見せつけるように片尻を上げる。

小久保のセクシーポーズに、ジーンズに浮かび上がるムッチリとしたお尻に、彼は釘付けだった。

「鼻、伸びてるわよ」

小久保にそう指摘され、慌てていやらしい顔を戻す。しかし、目はどうしても彼女の臀部に向かい、その体勢から『ある想像』をしてしまう。

そして、それを見抜いたように……。

「今、あなたが妄想してること、したげよっか」

挑発的な笑みを浮かべながら、小久保はそう言った。その言葉に思考を停止させた彼は、呆然とした表情で彼女を見た。

彼の『ある想像』を表すために、小久保はさらに尻を浮かせて目を細めた。

「……ん」

と軽く力み、小久保の尻がわずかに震えると共に――

ブッ！ ブスウ~~~~ッ！

空気の抜ける激しい音が室内に響き渡った。

一瞬、何の音が分からなかった彼であったが――

鼻元に漂う臭いが、音の正体を理解させた。

彼の鼻に漂ってきたのは、むう〜んと鼻腔を刺激する、肉々しい発酵臭だった。どこことなく甘ったるく、嗅いでいると頭がボーッとしてくるような魅惑の香氣……。

オナラだ。

憧れの上司が、自分の目の前で放屁したのだ。

その事実には啞然としていると、小久保はクスクスと悪戯っ子のような笑みを浮かべながら言う。

「ごめんなさい、オナラしちゃった♪」

そう舌を出し、手を合わせて謝る小久保。放屁した恥ずかしさも、気まずさもないようだった。彼女が故意に放屁したのは間違いなかった。

彼の動悸は頭に響くほどに激しくなり、鼻に流れ込む屁の香りが性的興奮を煽る。小久保の尻に顔を押しつけてオナラの臭いを嗅ぐ妄想が、自然と脳裏を巡り、彼の股間に大きなテントを張らせた。

だが、この事実を小久保に知られるわけにはいかない彼は、彼女の放屁を茶化すように笑った。

しかし、小久保には全てお見通しのようで……。

「こういうの、好きなんでしょう？」

彼の額に冷や汗が滲む。

「女の人がおナラするのに、興奮しちゃうんだよね？」

一気に核心をついてくる小久保に、彼は目を泳がせるしかなかった。

「さっきね、あなたがトイレ行ってる間に、こっそりね、パソコン見ちゃったの」フフフ——と楽しそうに笑って。

「ダメだよ、履歴はちゃんと消さなきゃ」

その言葉に、彼は急速に体温が下がるように感じた。

自分のアダルトサイト巡回の記録を見られたのだと、悟ったからだ。

オナラフェチ御用達の、数々のサイトを——

頭が真っ白になり、何も言えず固まる彼に、引き続き挑発的な笑みを見せながら——小久保は彼の股間に触れる。

「あ、ホントに勃ってる〜」

オナラによってカチカチに勃起したペニスをズボン越しに触れながら、小久保はそう楽しげに言う。撫でさするように、彼の陰茎を刺激した。

憧れの女性にペニスを弄られ——

気持ちよさに情けない声を漏らし、体をピクピク震わせた。

「すごいね、オナラで本当に興奮しちゃうんだ〜。オナラの臭い、好きなの？」そう楽しそうに訊ねる小久保に、恥ずかしさから彼は首を横に振った。

「ええ〜、ウソはよくないな〜」

彼の体に手を這わせ、顔を近づける小久保。キスができるほどのその距離感に、

彼は目眩を催した。

「しいゝ」

彼の唇に人差し指を当て、小久保は目を細めた。

「……んう」

プ~~~~ッ！ バスッ！ プレヰィ~~~~ッ！

ジーンズに籠もるような音が三発、強烈な空砲が放たれた。

再びの放屁に、彼の本能は逃れられない。放屁に興奮する様子を、如実に表してしまった。

「……鼻息、荒くなっちゃったね。しかも、チンチンぴくってなった」

彼の如実な反応に、してやったりといった微笑みを浮かべる。

「好き、なんだね？ オナラ」

もう観念するしかなかった。彼は力なく頷いた。

「ヘンタイだね、こんなのが好きなんで」

口角を吊り上げながらそう言うのと、小久保は可愛らしい小鼻を慣らした。

「んう、くっさあゝい。ひっどいニオイだね、私のオナラ」

小久保はそう言って、ほんの少しだけ恥ずかしそうに笑った。

小久保のオナラは一般的な感性からすれば、間違いなく『クサイ』ものだった。おそらく、彼女の無類の肉好き由縁の、強烈な腐肉臭をベースに、オナラ特有の硫黄の香りや妙に生々しい生臭さがブレンドされ、鼻の曲がるような臭いが形成されていた。一般人が嗅げば、間違いなく顔をしかめるだろうし、美人な彼女を幻滅の対象とするであろう悪臭だ。

しかし、彼にとってこれら放屁臭は得も言われぬ芳香だった。もちろん、臭いから良いというわけではない。憧れの女性からこんなにも強烈な臭いが放たれるという事実には、彼は性的興奮を覚えるのだ。

オナラフェチだと露見した彼は、もはや体裁も気にせず空気中に漂う屁成分を吸収した。

「んうゝ……ちよつと嗅ぎ過ぎ、だよ？」

自分の恥ずかしい臭いを堂々と臭われるのはさすがに恥ずかしいのか、小久保は顔を赤く染めながらそう言った。その魅力的な仕草に、彼はますます興奮を募らせていった。

抱きつくように体を寄せ、服越しにカリカリと乳首を弄りながら、小久保は訊ねる。

「ねえ……お尻に顔埋めて、オナラ嗅ぎたい？」

それは願ってもない提案で、彼は乳首責めの気持ちよさに涎を垂らしながら、うんうんと頷いた。

「ふうん、そうなんだ」

意地悪な表情を浮かべて、小久保は言う。

「でも、さっきウソついてたしな、どうしよっかな……」

小久保は彼の方を向いたままお尻を上げ、魅了するように左右に振りながらぶうぶうと尻を鳴らした。その動作にさらに興奮し、本能に支配された彼は、ごめんなさいと謝って許しを乞うた。

「ん、そんなんじゃダメかな」

くすくすと微笑みながら小久保は告げる。

「私は小久保さんのオナラが大好きで、くっちゃいぶうぶう、いっぱい嗅がせてください……って言ってくれたらいいよ」

あまりに恥ずかしいその台詞に、彼は耳を疑う。まさか、本当にそんなことを言わせるつもりなのか、と彼は小久保の様子を伺った。

しかし、どうやら本当らしい。

「イヤなら別にいいんだけど、私はどっちでもいいし」

そう言いながら、小久保は彼を押し倒し、顔の横に手をついて覆い被さる。

薄らと細めた挑発的な目つきが、彼の心を捕らえて離さない。

「ほら、早く言っちゃった方がいいよ。でないと……」

小久保は顔を近づけ、少しだけ眉をひそめて力んだ。

「……ふっ」

ブズッ！ ブビッブウ~~~~~ッ！

本日何度めかの快音が鳴り響く。

またもや小久保が放屁したのだ。

「あなたのだ、いすきなオナラ、このまま全部漏らしちゃうからね。お酒で発酵した極上のオナラ、嗅ぎ漏らしちゃっていいのかな？」

そうくすくすと微笑むと、小久保は彼の胸に頭を乗せ、彼にも見えるほどに尻を上げた。そして――

「……んぐっ」

ブブッ！ ブウ~~~~~ブウ~~~~~ッ！

豪快かつ滑稽な屁を思いきり解放放った。小久保のガスは空気中に霧散し、黄色く色づきそうなほどの臭いをさらに広げていく。

彼の鼻腔にも、小久保の放屁臭が入り込む。小久保特製の魅惑のアロマに、彼の股間は身悶えるように痙攣した。

もはや、彼は小久保の屁の虜であり、彼女の尻に顔を埋めてオナラを浴びたいという欲求には抗いようもなかった。

彼は恥辱に悶えながら——小久保の言う通り、恥ずかしいその台詞を口にした。

ぶぶづっ、ぶびい~~~~っ！

「えゝ？ なに？」

小久保は意地悪そうな目つきを浮かべながら、上目遣いで彼を見た。

彼のか細い声は、小久保の放屁にかき消され——あるいは、聞こえないフリをしたのかもしれないが——彼女の耳には届かなかったようだ。

「もっとハッキリ言ってくれないと、分からないよゝ」

ぶづ~~~~とガスの残滓を放り出しながら、小久保はからかうように笑った。まるで、気まぐれな猫のようだ。

彼は小久保に弄ばれる感覚にさらなる興奮を募らせながら、もう一度、その恥ずかしい台詞を口にした。今度は放屁にかき消されないように、大きな声を心掛けて。彼の恥ずかしい宣言をしかと受け取った小久保は、極上の笑みを浮かべた。

「んふふ、そっかゝ。そんなに嗅ぎたいんだ」

部下をまんまと籠絡した小久保は、背徳間と羞恥にゾクゾクと背筋を震わせながら、ジーンズに手をかけた。

「じゃ、嗅がせてあげるわね」

ジーンズをその場で脱ぎ、ピンクを基調としたショーツを露わとし、ムッチリといやらしいその桃尻を——彼の顔に落としたりした。